

三百頭の山羊を渡すお話

『ドン・キホーテ』のジョーク

2022/04/29



小説の親

『ドン・キホーテ』は、すべての物語の源泉です。モーツァルトも、多くのオペラ作曲家たちも読んだものと思われます。《コシ・ファン・トゥッテ》の原型 (199 頁『無分別な物好きな小説』) もあり、ロマン派のオペラやオペレッタの主題である「貴賤結婚の悲劇」(165 頁『第 28 章』) もあります。後世の多くの作家の物語のあちらこちらに、その影響が見られます。直接引用されるのでシェイクスピアの影響の方が顕著のようですが、「ドラマ」の劇性と「ノヴェル」の物語性の深いところで後世の文学者や芸術家たちに恩恵を与えた点では、セルバンテスはシェイクスピア以上でしょう。

物語の源泉の基本として、こういうのがあります — サンチョ・パンサが旅の最中に暇なご主人さまを慰めようとわざとらしい「ジョーク」をいいます。物語のあらすじには必要のない全くの「ジョーク」です。抱腹絶倒のお話です。前巻の 103 頁です。

羊飼いの娘に惚れられた山羊飼いの若者が 300 頭もの山羊を連れて逃げ出します。娘は追いかけます。

大きな川が目の前に現れました。300頭の山羊を渡らせなければなりません。一人の漁夫が見つかったので山羊を渡してくれるように頼みました。漁夫の舟は小さくて、一度に、人一人と山羊一頭しか乗れません。そこで、漁夫は山羊一頭を乗せて向こう岸に渡り、戻ってきては、また一頭を乗せて渡ります。戻ってきてはまた、一頭、また、一頭。そして、また一頭、また一頭……。

「旦那さま、この漁夫が連れて渡る山羊の数をかぞえてくださいましよ。たとい一頭でも数を覚えちがうと、この話は台なしになって、それっきりひとつとも話せなくなりますんでね。そこで、ようござんすかい。ところで、向う岸の船着き場は泥んこだらけでおまけに滑るんで、漁夫は往くさ帰るさにえらく暇がかかりました。それでも奴は次の山羊をとりて帰って采ました。それからまた次のやつ、それから次のやつと」とサンチョ・パンサ。「もう山羊は残らず渡したことにするがよいぞ。そんな工合に行ったり来たりするのは止めにせい。それでは一年たっても山羊は運びきれまい」とドン・キホーテが言葉をはさんだ。

「今まで何頭渡りましたかい？」と突然、サンチョがたずねた。

「何を馬鹿な、わしがさようなことを知っているというのか？」とドン・キホーテが言った。

「さあそこでもございますよ、わしがようく勘定をしてくださいましと申したのは。やれやれこの話もこれでおしまいですわい。もうどうにもつづけようがありませんものな」

「なんでまたそうことになるんだ？ 河を渡った山羊の数をくわしく知ることがそれほどこの話の肝腎な点なのか、数を一つでも間違ったら話をさきへ進められないのか？」とドン・キホーテがたずねた。

「いいえ、旦那さま、けっしてそういうわけではありませんがね。というのは、そらわしが旦那さまに、何頭の山羊が渡ったかおっしゃってくださいとお訊きしましたでしょう、すると旦那さまが知らないとお答えなさいましたでしょう、ちょうどあのとたんこれからお話ししようということが残らずわしの頭から抜け出してしまったというわけでもございますよ、いやほんとうに大したためになる、面白い話でがんしたがね」

ここがこのサンチョ・パンサの物語のオチです。相手をまんまと担いで、相手のセイにして、どこまでもつづく長い話を無理矢理終わらせるのです。

「してみると、その話はもうおしまいになったのだな！ どかなりと好きところで終わるがよいさ。拙者は本当のことを言うがな、おぬしはまったく、世界広しといえ、これまで誰一人思いついたこともないような、おまけにその話しっぷりといい、話しの締めくくりといい、一生かかっても二度とふたたび見られそうにも思えない、およそめずらしい作り話の一つを、それとも話というか物語というか、話してくれたものだ。もっともおぬしのけっこうな知恵では、ほかのことは期待もしなかったがな」

「そんなものかもしれませんよ」とサンチョがひきとった。

「しかしわしの話については、もう何も申しあげることにはございません。山羊の渡った勘定の間違いがおこるとたんにそこでおしまいがすからの」

この話に大いに喜んだドン・キホーテは、この奇抜な話のアイデアに感心し

て、サンチョ・パンサの奇才を誉めます。この長編小説の筋立てには、まったくなんの関係もないお話です。でも、こういった冗談もときおり、突然、物語の中に現れるのです。なんともまあ、不思議な小説です。セルバンテスは、一体、だれに読ませようと思って書いたのでしょうか。

宮廷のお姫さまたちも

芭蕉の句に、「梅が香やしらら落窪京太郎」があります。でも、これも芭蕉の「難解句」の一つです。「しらら」も「落窪」も「京太郎」もこの時代にはよく知られた古典文学の名前で、継子イジメのお話だそうです。それで、どうだということでしょうか？ この句を解くヒントは、「梅の香り」と「物語の名前」だけです。この内、物語の本の名は、浄瑠璃十二段草子「姿見」の段の文句取りで、「よみけるさうしはどれどれぞ、源氏・さごろも・こきん・まんやう・いせものがたり・しらゝ・おちくも・京太郎」からとったものであることは分かっています。そして、「梅が香」から、庭園に梅が咲きほこっているのかな宮廷の情景となり、新春の読み初(ぞ)めで、広間に、お姫さまや女官たちが集まって、悲しくも、不憫な昔の物語を、だれかが読むのを、座ったり、寝そべったりしてきいている、美しくもはやかな、平安時代のゆかしい和やかな風景が目には浮かびます。浮かばないと困ります。「物語」は、だれかが読んで、みんなで聞くものなのですから。これこそ、「物語の源泉」です。

小説『ドン・キホーテ』もまた、大勢が集まる旅籠(はたご)や裕福な家庭や貴族の館で読まれたのでしょうか。物語の中に、格言や風刺や笑い話が多いのもうなずけます。「山羊三百頭」のお話も、「ワハハハ」と大きな笑い声が部屋中に満ち満ちたことでしょうか。物語は、今のように、書齋で一人で黙読するものではなかったのです。

それで、みなさまとお話を共有するために、このホームページでご紹介しました。お笑い下さい。

都築正道